

私が聖書から学んだこと

I 新約と旧約の違い

⑤旧約は「主を(神を)信じる」よりも「主を(神を)尋ね求める」を多用する

	旧約	新約
信じる(信頼する)	16 (17)	20 (3)
尋ね求める(呼び求める)	26 (12)	0 (2)

①新共同訳で数えると、主なる神を「信じる」は旧約では16回なのに、新約では20回。確かに、主なる神を「信頼する」を加えると、旧約では33回となり、新約の23回を上回るが、旧約聖書は新約聖書の3倍ほどの分量になることを考慮すると、旧約での用例は新約の半分になる。

②しかし、主なる神を「尋ね求める」になると、新約の0回に対して旧約では26回である。旧約が「信じる」よりも「尋ね求める」を多用するのはなぜだろうか。新約から考えると、イエス・キリストの到来がこの差を作り出したといえるだろう。それを端的に示すのはヘブライ人への手紙1章1―4節である。

⑥ヘブライ人への手紙1章1―4節

神は、かつて預言者たちによって、多くのかたちで、また多くのかたで先祖に語られたが、2この終わりの時代には、御子によってわたしたちに語られました。神は、この御子を万物の相続者と定め、また、御子によって世界を創造されました。3御子は、神の栄光の反映であり、神の本質の完全な現れであって、万物を御自分の力ある言葉によって支えておられますが、人々の罪を清められた後、天の高い所におられる大いなる方の右の座にお着きになりました。4御子は、天使たちより優れた者となりました。天使たちの名より優れた名を受け継がれたからです。

傍線部の逐語的な訳

1 多くのかたちで、多くのかたで

かつて 神は 語って 先祖に 預言者において

2 この終わりの時代には 彼は語った 私たちに 御子において

その御子を(関係代名詞) 神は定めた 万物の創造者と……

①原文では1節から4節までが一つの文章であり、1節は分詞形「語って」による副文であり、2節以下が主文になる。1節で旧約の時代について語り、2節以下では新約の時代の特徴を書いている。「傍線部の逐語的な訳」の1節二行目と2節一行目の文章は同じ構文であり、どちらも時を示す句で始まり、主語と動詞が続き、次に語りかけられた相手が述べられ、最後に神の言葉の語り手が明らかにされている。両者を比較すると、主語と動詞は「神は語って」と「彼(＝神)は語った」であるから、同じであるが、残りの三つの要素が異なる。神が語った「時」は、「かつて」と「この終わりの時代」であり、神が語った「相手」は「先祖」と「私たち」であり、神の言葉の「語り手」は「預言者」と「御子」である。旧約も新約も「神が語

った」言葉であることでは同じだが、語り方が異なっている。その違いを説明するのは、1節一行目の「多くのかたちで、多くの仕方で」と2節二行目以下の「御子」を先行詞とする関係代名詞文である。

②人は迷いがあるとき、いろいろな形や仕方ですべてみるのだが、預言者が「多くのがたちで、多くの仕方です」語ったのは、なにがしかの迷いが残っていたからだろう。神が迷ったのではなく、預言者が神から聞いた言葉をどのように語るべきか迷ったのだ。しかし、「御子」は2節二行目以下に「…神の本質の完全な現れ…」とあるように、神の思いを完全に知っているから、迷うことなく、神の思いを地上に現したのである。従って、新約を特徴付ける「終わりの時代」とは、時間の流れの終わりではなく、神の思いの啓示が終わった時代ということである。啓示は終わったが、人間は限界をもつがゆえに、イエスによる神の啓示を完全に理解し尽くしてはいない。だから、時間の流れはまだ続いている。

しかし、旧約が主なる神を「信じる」というよりも、「尋ね求めた」のは御子を知らなかっただけではない。他にも理由がある。

## Ⅱ人の思いは神から見れば「たくらみ」

### ⑥イザヤ55章6―11節

- 6 尋ね求めよ 主を 彼が見出されるときに  
彼を呼びなさい 彼がいるときに 近くに
- 7 捨てるだろう 神に逆らう者は 彼の道を  
そして邪悪な人は その思いを  
そして立ち帰るだろう もとに 主の  
そして彼は彼を憐れんでくださるだろう  
そしてもとに 我々の神の  
なぜなら 彼は豊かであろう 赦すことに。

8 実に 私の思いは あなた方の思いではなく、  
そして あなた方の道は 私の道ではない。

—主の仰せ—

9 ように 高くある 天は 地から、  
そのように 高くある 私の道は あなた方の道から  
そして私の思いは あなた方の思いから。

10 実に ように 下る 雨が そして雪が から 天から  
そしてそこに ~~ない~~ 帰る  
むしろ 潤す 地を、  
そしてそこを はらませ、そこに芽生えさせ  
そして与える 種を 種まく者に  
そしてパンを 食べる者に、

11 そのように あるだろう 私の口から出る私の言葉は  
~~ない~~ 帰るだろう 私のもとに むなしく  
むしろ 行うだろう ところのことを 私が喜ぶ  
そして繁栄させる ところのことを 私が託した。

①神の言葉を満載した出来事が起ころうとしている。第二イザヤにとって、キエロス

はイスラエルの神が派遣した解放者であり、彼の使命は捕囚民をエルサレムへと帰還させることにある。この出来事は歴史の偶然ではなく、神の呼びかけの現れであるから、捕囚民が神の言葉に「耳を傾けて聞く」ための、また神の言葉を「見出しうる」千載一遇のチャンスなのである。

そこで第二イザヤは「主を尋ね求めよ、見いだしうるときに。呼び求めよ。近くにいますうちに」と呼びかける(6節)。「主を尋ね求め、呼び求める」とは、もともと「神殿に行き、供え物と祈りをささげて、神を礼拝すること」を表すが、ここでは精神化され「神のほうへ向きを変え、その恵みを味わう」といった意味だろう。

8-9節では、神は地上に無関心ではいられない方であり、その言葉は必ず出来事となる、と力強く宣言される。神は人間には及びもつかない思いを持ち、人間の予想を越えた道を持っている。実際、異邦の王キュロスを解放者として用いるとは誰も思いつかないこと。

誰の目にも確かな、天から降る雨と雪の働きを思い起こさせ、「そのように私の口から出る言葉」もむなしく「私のもとに帰らず、むしろ私の望むこと」を成就させる、と説く。キュロスによる解放という出来事に響く神の言葉を第二イザヤは聞き取っているからである。

②人間の思いは人間の目には完全と見えても、神から見れば、不完全である。神の思いと人間の思いは天と地ほどの差があるからだ。そのような人間が神の思いを「尋ね求める」ことをやめれば、ブーバーの言う「神の蝕」が生じることになる。「神の蝕」とは次のようなことを言う。

### Ⅲ 「神の蝕」に陥ったナザレの人々

#### ⑥マルコ6章1-5節

1 イエスはそこを去って故郷にお帰りになったが、弟子たちも従った。2 安息日になつたので、イエスは会堂で教え始められた。多くの人々はそれを聞いて、驚いて言った。「この人は、このようなことをどこから得たのだろう。この人が授かった知恵と、その手で行われるこのような奇跡はいったい何か。3 この人は、大工ではないか。マリアの息子で、ヤコブ、ヨセ、ユダ、シモンの兄弟ではないか。姉妹たちは、ここで我々と一緒に住んでいるではないか。」このように、人々はイエスに「つまずいた。4 イエスは、「預言者が敬われないのは、自分の故郷、親戚や家族の間だけである」と言われた。5 そのころは、くわすかの病人に手を置いていやされただけで、そのほかは何も奇跡を行うことがおできにならなかつた。6 そして、人々の不信仰に驚かれた。

①イエスの言葉に「驚いた」人々が「つまずく」ことになってしまったのは、なぜだろうか。太線をつけた「このように」は原文ではカイ(そして)であるが、邦訳はほとんど「このように」とか「こうして」と訳している。確かにここはその意味であろう。とすると、2節から3節にかけての彼らの言葉に、つまずきに終わった原因があるはず。「どこからなのか：何なのか」と尋ね続けるかぎりつまずきは起こらない。3節の彼らの言葉につまずきの原因があるはず。そこに語られたことは、史実であるかどうかは別として、聖書では事実とされていること。日蝕とは、太陽と地球の間に月が入り、太陽を蝕んでしまうこと。神の蝕とは、神と人間の間に人間の思いが入り込んで、神を蝕んでしまうことである。旧約が神を「尋ね求めよ」と述べるのは神の蝕をさけるため。

IV 人間がもつ弱さは偶然ではない

◎詩編一〇三

- 1 お前はたたえなさい 私の魂よ 主を  
すべての 私の内面よ を名 彼の聖の
- 2 お前はたたえなさい 私の魂よ 主を  
そしてお前は忘れるな すべての 彼の援助を
- 3 赦す方 すべてに対して お前の罪の  
癒す方 すべてに対し お前の病の
- 4 贖う方 穴から お前の命を  
お前に冠する方 慈しみを そして憐れみを
- 5 満足させる方 良さで お前の麗しさを  
新しくなる 驚のように お前の若さを

- 6 行う方 義を 主は  
そして裁きを すべてに対して 虐げられている者たちの
- 7 彼は知らせた 彼の道を モーセに  
息子たちに イスラエルの 彼の行為を
- 8 哀れみ深く そして恵み深い 主は  
遅い 怒りの そして多い 慈しみの

- 9 永久に 彼は争い続けない  
そして永久に 保ち続けない
- 10 私たちの罪に従って 彼は行わない 私たちに  
そして私たちの不義に従って 彼は報いない 私たちの上に
- 11 むしろ 高いように 天が 地の上に  
力強い 彼の慈しみは 彼を畏れる者たちの上に
- 12 遠いように 東が 西から  
彼は遠ざける 私たちから 私たちの背きの罪を
- 13 憐れむように 父が 息子たちを  
憐れむ 主は 彼を畏れる者たちを
- 14 なぜなら 彼は 知っている 私たちの造られる様を  
彼は覚えていて 次のことを 塵 私たちは
- 15 人は、  
草のように 彼の日々は
- 16 野の花のように そのように 彼は咲く  
なぜなら 風が それを通りすぎる そしてそれは存在しない

- 17 そして慈しみは 主の 永遠から そしてまで 永遠 上に 彼を畏れる者の
- 18 守る者たちに対して 彼の契約を  
そして彼の義は 息子たちに対して 息子たちの
- 19 勇士たちよ 力ある 行う者たちよ 彼の言葉を  
聞くために 声に 彼の言葉の
- 20 たたえなさい 主を すべての中の 彼の軍勢よ  
たたえなさい 主を 彼の使いの者たちよ
- 21 たたえなさい 主を すべてよ 彼の業の  
すべての中で 場所の 彼の支配の
- 22 お前はたたえなさい 私の魂よ 主を